

平成27年度第1回（第9回）外部アドバイザー委員会報告書

1 開催場所

倉敷市立短期大学 大会議室

2 開催日時

平成27年7月9日（木） 10:00～12:00

3 出席者

①委員：出席8名（欠席0名）

江島学長（委員長）、高田委員、山本委員、萱野委員、陶山委員、河合委員、佐藤委員、岸本委員

②教職員：出席6名（欠席1名）

溝手保育学科長、大原服飾美術学科長、三輪図書館長、安達学生部長、上村学生部主幹、峰尾事務局長、大平事務局主幹

③オブザーバー：出席1名

澤田企画経営室室長

4 次第

- （1）学長挨拶
- （2）外部アドバイザー委員自己紹介
- （3）短期大学関係者自己紹介
- （4）報告・審議事項

5 外部アドバイザー意見

- 意見1：県立公立市立高校は一部の大規模校を除いて生徒の募集に苦しんでいる。例えばある高校は定員の6割が地元出身。残り4割がバスやJRを使って地元以外から通っている。翔南高校も鷺羽高校もほぼ同じ状況。6割の生徒が地元から、残り4割が他地域から通っている。学校の在り方として地域との連携を大切にしようというのは高校も同じであるが、その場合の地域とは地元の事。本校としては児島地区との結びつきを強めること。地域の高等学校として地域との結びつきを生かして、在校生たちをどのように育てていくかということを考えている。卒業後、大学に進学する生徒は様々な地域に、専門学校に進学する生徒も岡山やその他の地域に出ていく。そこで地元に残る生徒は少ないが、卒業後に地元に戻ってきて就職をするという生徒を一人でも二人でもいればよいと思う。倉敷市立短期大学が地域と結びつきながら学生を育てていって同じように児島や倉敷に就職する学生を残していただければと思う。
- 意見2：（保育学科の学生は）倉敷市の試験を受けて欲しいが、学生は最初から無理だと受験をやめる。初めから諦めずにチャレンジしていただきたい。
- 意見3：非常勤として短大に15年勤めているが、最近の学生に問題があるとは思わない。だからこそ、公務員試験を積極的に受けて欲しい。
- 意見4：服飾美術学科の受験者数が少ないということで、就職と入学定員は密接に関係してい

ることであるが、入学し積極的に活躍できれば自動的に就職に繋がるのではと思うのだが、市立ということでももちろん児島をと考えられるのだろうが、東南アジアからの進出もあり、現実的には地元企業と学生がどのように関わっていくかが問題である。例えば留学生を受け入れて現状を知るなどの取り組みはいかがか。岡大の研究所についてであるが、研究者になるのは主に留学生で日本人は少ない。岡山大学は国立であるので、国のためになるということが前提になるのだが、留学生を受け入れることで回りまわって日本に帰ってくるという考え。グローバル化は避けて通れないし、国際的な感覚を身につけることは大切と考える。保育学科だけではなく服飾美術学科にもそのような感性が求められるのではないか。

○意見5：インターンシップという制度があるが、学生という立場でも企業の現場を体験して就職に結びつく、また企業側も人材確保という動きがある。以前は研究者と言えは大学に残るのが主であったが、今は企業でも研究者を採用している。児島の企業でも受けていただけるような働きかけをしてはどうか。

○意見6：倉敷外語学院の生徒についてだが、彼らは日本の学生と交流したいと言っている。先ほどから資料を見ていると大学祭やオープンキャンパスがあるので、そんな機会に参加できればと思う。御校の学生と少しでも交流の時間が持てるとありがたい。倉敷外語学院の生徒がボランティアを通じて繊維業界の方と出会うこともあり、機会があれば短大とシェアできればよいと思う。生徒たちはお互いの国の文化の違いを認め合い楽しんでいる。短大の学生も少人数であればこそ、お互いの出身県について語り文化の違いを楽しむことが出来るのではないかとと思う。

○意見7：最初、事務局から紹介があった平成30年に設立50周年を迎えるということで、服飾美術学科について地元の商工会議所から要望した経緯もあるわけだが、就職や定員の問題で非常に苦勞されている。商工会議所としても児島の繊維産業を元気にしたいとの願いがあり、頑張っている。短大との共通の課題であると認識している。倉敷市の産業の93%が水島で、児島の繊維関係は2.4%。93%の水島があればそれでよいのではないかと考えるもあるが、地場産業を大切にしようという市の考えを感じている。昭和30年に瀬戸大橋祭りが初めて開催された。1955年からちょうど60周年。昭和40年、国産ジーンズ発祥の地児島から50年目、平成17年6月に国産ジーンズ発祥の地児島を大発信してから10年。そういった節目がある。2018年は瀬戸大橋開通30周年の年。私どもが作った「むかし児島は島だった。」1618年に吉備の児島が陸続きになった。塩の代わりに綿ということで繊維産業の始まりとなった。2018年に吉備の国陸続き400年祭をしようと準備をしている。知事や市にも話をしている。今、地元と県、市でもって準備委員会に向けての準備をしている。短大とも一緒に進めていきたい。また、今年は倉敷で日本女性会議が開かれる。私事になるが、自社の社員の大多数は女性で様々な分野で力を発揮している。平成26年度、内閣府の街づくり再生事業で倉敷市も地域にビジョンを作成した。今、外国の研修生を受け入れているが、地元を良くしようとの考えを持つ人が頑張っていくこと、これが未来へ向けて続いていく大きな条件であるとの議論もあった。児島の繊維産業で働く女性は多く、女性の能力を存分に発揮できること、生き生きと頑張られていることを実際に学生に見ていただいて、倉敷市或いは地域として視点を当てた取り組みをすることにより、冒頭述べた就職、定員の課題が開けてくるのではないかと考える。もう一つはリタイアされた方に焦点をあて、物作りをゆっくり楽しんでいただく、そういった二つの視点が児島の繊維産業のビジョンの大きなところだと共通認識することが大

切。そういったところから元気のある短大を目指していけるのではないかと考える。

以上